



近況雜感

東京大学名誉教授（元第1部教授）

山 田 嘉 昭

先頃、「生産研究」50周年誌WG溝部裕司先生からお手紙を頂いた。来る99年に生産技術研究所は記念すべき年を迎える。諸先輩の方々に、生研での思い出、これからへの期待など、様々な思いを記していただくことを計画している。については寄稿を願えないかとのことで、迷いながらも「諾」の返事を差し上げてしまった。生研退官のとき、「研究覚書」と題し筆者が「生産研究」に寄せた一文を読み返すなどして、漸くここに回顧かたがた近況をとりまとめ、責を逃れることとしたい。

筆者が生研を去って、すでに16年余を数える。在職中には「生産研究」の特別号として、10, 20, および30周年誌が編集され、そこに山田研究室の記録を留めている。また、退官後の40年誌には、最後に過ごした4年間のことの要約するよう求められた。

退職後の方針について模索を続ける中、筆者は将来の拠点と考え、千代田線乃木坂駅、生研とは反対出口の乃木神社近くに一室を購めた。神奈川工科大学に教育の仕事を続けるようになってから遠く厚木市に通勤する中継点、その後には折々の仕事を著書にまとめる場所となつた。地の利を得て時折生研を訪ね、名誉教授に与えられる資格により、図書室を利用させて貰つてゐる。

図書室の様子はいまも殆ど変わっていないし、廊下でときどき昔の知己に声を掛けられ懐かしく思う。最近送られてきた生研ニュースには、第五部業務掛の「生研宝塚」メンバーの中に、良く存じ上げているお顔があった。それでも年月と共に研究室に掛かっている名札が変わり、未知の顔に出会っては、不審気な様子に戸惑うことがある。

少し太った体重を減らすため、乃木坂を中心に行動範囲を万歩に近く広げると、生研の頃には知らなかつた旧跡や坂道に出会う。六本木の地、hardy barracks の跡に生研が移つてから、筆者は千葉一信濃町一研究室を往復路とする日々を繰り返し、食事によく通つた六本木交差点界隈を除いては殆んど知ることが無かつた。今になつて、赤坂、溜池、虎の門、麻布辺りにまで足を延ばし、生研の建物が古いままに残された外で、進行していったバブルの跡、一方では盛んに続いている中央の開発、建築の現場に出会う。

筆者の経験では、大学において先端技術が生まれたとしても、価値の高いものであるほど、永く先頭を走り続けることは難しい。高価な設備を購入する幸運に恵まれることがあるあっても、研究室単位では維持、更新に無理がある。どれだけ多くの人材で研究室が構成されているか、そのことに全てが懸っていると思う。成果に魅せられ、人は研究室に集まる。しかし、人材の定常的な流れの確保されていることが大切である。源泉の第二工学部を失った生研が、千葉を離れ、麻布米軍跡地に移転を決断したのは、このような事情に動かされてのことであったと思う。六本木の地の利と、基盤を工学部と共有する大学院教育に加わることで、筆者もまた国内外から優れた大学院生、研究生に恵まれることになった。

生研での後期 1967 年に出会った有限要素法のインパクトを忘れる事はできない。当時、筆者は 45 才、初めて海外旅行を試みる。その後に度々海外出張の機会を得たが、わが国には個人の優れた研究があるにしろ、大学の環境、研究室の活気、国内はもとより海外から人材を迎えるための施設など、欧米には到底及ばないことを痛感した。

女流作家 宮部みゆきさんは、オール読み物に連載された二・二六事件を背景とする小説の中で、生研の建物を訪ね、廊下を通り過ぎたときの印象を語っている。そこで行われている研究は別のこととして、筆者には共感するところがあった。「八月の雪」は、その第1回が「人質カノン、文芸春秋社」に収録されている。しかし、第2回以後に生研を訪ねている連載が完結したかどうか、筆者は知らない。

第二工学部から生産技術研究所に移行した頃を知り、キャンパスの麻布移転を経験したメンバーの多くは去った。50周年誌は、いま生研を背負うスタッフが生研への思い、現在の姿や将来に向かっての抱負を語る記事で飾られ、外からは数々の賛辞と期待が寄せられよう。近くには、駒場に新キャンパスが開かれると聞く。完成の頃には駒場を訪ねる機会を得たいと思う。